

資料 山之口獏：「文藝」への投稿作品

松下, 博文
九州大学文学部助手

<https://doi.org/10.15017/10402>

出版情報：文献探究. 25, pp.18-27, 1990-03-31. 文献探究の会
バージョン：
権利関係：

資料 山之口 獺

— 「文藝」への投稿作品 —

松下 博文

ここに紹介する資料は昭和十年から同三十八年までに雑誌「文藝」⁽¹⁾に掲載されていた作品群である。全容を列記しよう⁽²⁾。

- 昭和10年2月号 — 「数学」 「座蒲団」
- 昭和10年11月号 — 「会話」
- 昭和13年12月号 — 「世紀」
- 昭和14年9月号 — 「結婚」
- 昭和15年5月号 — 「疊」
- 昭和16年7月号 — 「神楽坂にて」
- 昭和25年9月号 — 「相子」
- 昭和26年2月号 — 「税金のうた」
- 昭和38年9月号 — 「襦袢は寝てゐる」 「会話」 「夜」 「数学」 「世はさまざま」 「大儀」 「ねずみ」

このうち「世紀」「神楽坂にて」は思潮社版「山之口獺全集」には未収録の作品。しかしながらこれらについては昭和五十九年十二月十五日付の「沖繩タイムス」夕刊紙上ですでに報告しておいた。また、三十八年九月号掲載詩七篇は伊藤信吉「低音部からの発声」⁽³⁾を同載したいわゆる獺への追悼篇であって全て生前に発表済みの作品群である。獺は同年七月十九日、戦後の日本の復興と繁栄とを全世界に鮮烈にアピールした東京オリンピック開幕のおよそ一年二カ

月前に胃癌のため新宿戸塚の大同病院にてその五十九年の詩的生涯を閉じたのであった。ゆえに当誌への実質上の投稿はいちおう昭和二十六年二月号に掲載された「税金のうた」までと言いついていいであろう。

今回は雑誌初出本文と既刊詩集収録本文との間に多少の本文異同が見られる作品があったためその場合に限って本文研究の基礎資料となるように両者を並載することにした。なお、本稿は獺作品の初出年月日を究明することを目的とした調査の一環上で収獲されたものである。従来、かかる基礎的な調査はほとんど等閑視されてきた。

雑誌「文藝」が創刊された昭和八年はまさに文芸復興の時代であった。前々年九月、奉天郊外柳条湖の南滿洲鉄道線路の爆破によって生じた滿洲事変以後、政府の思想弾圧は際立って強化される。それはまさしく昭和初年の文壇を席捲していたプロレタリア文学の退潮を余儀なくするものであったが、しかしながらこの一潮流の退潮という事象と時を同じくして新雑誌の相次ぐ創刊という現象が現れた。かかる現象をも含めて同時代に生じたさまざまな動向を、総じて、近代文学史上の“文芸復興”と称する。既述した雑誌創刊という出版界の現象面だけを取り上げればたとえばそれは「文学」「文化集団」「文学界」「行動」「文藝」（昭和八年）、「文学評論」

「詩精神」「現実」「文芸街」「四季」(同九年)などの簇生という形で出現した。

かような気運の中で「文藝」を創刊した改造社は、殊更、海外文学の紹介に力を入れたようである。志賀直哉「『女の学校・ロベール』を読む」を巻頭に配してゴーストの世界初発表特別寄稿小説「肥大漢」(上田進訳)を巻尾に配するその編輯方法や(世界文壇の新動向)と題して岡沢秀虎「ソウエート文学の新様式」・中島健蔵「近頃の佛蘭西文壇」・織田正信「英文壇の新情勢」・高垣松雄「アメリカの実験派小説」・芳賀壇「現ドイツ文壇を動かすもの」などの文章を特集する趣向やさらにはまた三木清「ネオヒューマニズムの問題と文学」・太宰施門「バルザックの世界」などの評論を収載する創刊号の編輯方針には時代の旗手たろうとする積極的な意欲が明瞭に窺える。このような状況の中で山之口貌は己の詩的営為を脈々とつづけていた。

その作品内容については第一詩集「思弁の苑」前半部の作品群(「加藤清正」「鼻のある結論」)や本誌前号に紹介した作品群(「生きてゐる位置」「僕の詩」)などを一読していただければいいのだがとりあえずそれらの創作群の一特徴を評するならば「時代状況に対する鋭い批判」ということになるであろう。新出資料「世紀」⁽⁵⁾「神楽坂にて」などはまさしくその好個の例といつてよかつた。

「世紀」

まはれ右の出来ない

血眼の世紀よ

なにをその眼でみたいのか

背にはいくつも重い荷を負ひ

世紀よ

おまへは血眼で

前へ

前へとつんのめつた

「神楽坂にて」

ばくさん

と呼びかけられてふりかへつた

すぐには思ひ出せないひとりの婦人が

子供をおぶつて立つてゐた

しかしまたすぐにわかつた

あるビルディングの空室でるんべん生活にくるまつてゐた頃のあのビルの交換手なのであつた

でつぶり肥つてゐた娘だが

背中の子供に割けたのであらう

あの頃のあのでつぶりさや娘さなんかはなくなつて

婦人になつてそこに立つてゐた

びつくりしましたよ

あさちゃん と云ふと

婦人はいかにもうれしさうに背中のを僕に振り向けたあゝ

もうすぐうちにもこんなかたまりが出来るんだ

僕はさう思ひながら

坊やをのぞいてやつたりした

しかしその婦人はなにをそんなにいそいだのであらういまにおやちになるといふ

このばくさんに就いてのことなんかはそのまゝここに置き忘れてたゞのひとこともふれて来なかつた
婦人はまるで用でも済んだみたい

中の物を振り降り

坂の上へと消え去つた。

雑誌掲載年月日から考えて前者は「思弁の苑」（昭和十三年八月）

刊行後、後者は第二詩集「山之口獏詩集」（同十五年十二月）刊行後の創作であろう。この両者間に横たわる個人史的な時間の流れは昭和十二年七月七日北京西南郊外の盧溝橋で発生した日中兩軍の衝突による日中戦争への突入から南京占領・武漢三鎮占領・ノモンハン事件・日独伊三国同盟を経て太平洋戦争へといきなだれ込んでゆく忌まわしい歴史的時間の流れとその時間的座標軸を同じくしていた。いみじくもそれは、獏のいう「まはれ右の出来ない／血眼の世紀」が「前へ／前へとつんのめつ」てゆく悪夢の時代であったが、とはいっても、自身は時代の逼迫する不幸に曝されてばかりいたわけではない。かかる時代の真っ只中で長らく切望していた生涯の伴侶をようやく手にすることが出来たからである。

昭和十二年十二月、支那事変の状況下に山之口獏は金子光晴・森三千代夫婦の仲介によつて二歳下の安田静江と結婚する。式の当日には三円で染め変えた茶褐色の背広姿になった。長い間の放浪生活にピリオドを打つてついに一定の住所を持つに至つた獏山口重三郎の一生一度の矜れ姿であった。場所は新宿の泰華楼。身分相応の料理を注文し媒酌の金子に促されてひとまず新郎としての挨拶も述べた。だが、自分の所有物といえ己の肉体とトランク一個と自作掲載誌と原稿のみであつて他にはなにひとつの家財道具も彼は所有してはいなかつた。かかる実情を憂慮したのはむろん金子夫婦である。

金子は自宅から息子の落書きだらけの小さな机と小さな本立と自分のどてらと夫人手縫いの寸詰まりの座蒲団一個を獏の手許に届けてくれたのである。もちろん新婦静江の許からも真新しい桐の箆笥やら新しい鏡台やらその他もろもろの家財道具が運ばれてきた。

かようにしてどうやら獏の新婚生活はスタートしたのだが結婚するとまもなくそれまで働いていた温灸器販売店が解散してしまいたちまち路頭に迷うことになる。新婚早々、年越しそばも食えない餅ひとつも飾れないまことに惨憺たる正月を迎えることにもなったのである。「結婚」「量」、それより遥かに下つた「税金のうた」などはかかる実生活上の悲喜劇が見事に透写された好篇といつていい。ただ、もとより、かように悲惨なことのみではなかつた。

昭和十六年六月、結婚四年目に長男重也が生まれる。「神楽坂にて」はそのことを予想させるしおそらくこの作品は同月かそれに近い時期に創作されたものであろう。しかし、時代は支那事変の状況下にあつて世相は混乱し人々の実生活は極めて苦しいものであった。作中で子供をおぶっていた婦人がそくさと獏の前から消え去つたのは自分の生活が精一杯であつて他人の子供の誕生などいっしょに喜び合えるようなそのようなゆとりなどなかつた時代の明らかな象徴であろう。そして獏は生まれてきた子供を一年のちに失つた。思うに獏自身の生活環境はむろんのことその他の生活事情・食糧事情などの悪化が影響したのではないか。吾が子の成長を楽しみにしていただけにどれほど無念なことであつたらう。

○

昭和十年十一月号に発表された「会話」について述べておこう。

「会話」

お国は？ と女が言った
さて、僕の国はどこなんだか、とにかく僕は煙草に火をつけるんだが、刺青と蛇皮線などの聯想を染めて、凶案のやうな風俗をしてゐるあの僕の国か！
ずつとむかふ

ずつとむかふとは？ と女が言った
それはずつとむかふ、日本列島の南端の一寸手前なんだが、頭上に豚をのせる女がゐるとか素足で歩くとかいふやうな、憂鬱な方角を習慣してゐるあの僕の国か！ 南方

南方とは？ と女が言った
南方は南方、濃藍の海にすんでゐるあの常夏の地帯、龍舌蘭と梯梧と阿旦とパイヤなどの植物達が、白い季節を被つて寄り添ふてゐるんだが、あれは日本人ではないとか日本語は通じるかなどと話し合ひながら、世間の概念達が寄留するあの僕の国か！
亜熱帯

アネツタイ！ と女は言った
亜熱帯なんだが、僕の女よ、眼の前に見える亜熱帯が見えないのか！ この僕のやうに、日本語の通じる日本人が、即ち亜熱帯に生れた僕等なんだと僕はおもふんだが、酋長だの土人だの唐手だの泡盛だのの同義語でも眺めるかのやうに、世間の偏見達が眺めるあの僕の国か！
赤道直下のあの近所

「カクテル・パーティー」で第五十七回芥川賞を受賞した大城立裕はかつて次のようなことを言った。⁽⁴⁾「われわれ沖繩の歴史というのは、自分の力で作りあげてきたものではない。いつでも外の力で作りあげられてきたやうな気がする。という一つの仮説のやうなものがあり、そういう面で異邦人との接触の面から沖繩をとらえるという題材のとりかたができてきているだろうと思つている」。今に連綿と続く大城の一貫した創作態度といつてよい。確かに沖繩の歴史は「異邦人との接触」のそれであつてそれゆえこそその歪みを生じてきた。「会話」はその歪みが婉曲的にしかしながら直截に表現された作品ともいえる。

明治五年、明治新政府はそれまで琉球王尚氏が統治していた「琉球国」を外務省の管轄のもとに「琉球藩」と改称させる。そしてさらに七年後の十二年にはこの「琉球藩」を置県処分に処し「沖繩県」と改めさせるのだが、爾来、太平洋戦争後のアメリカ合衆国の統治を経て昭和四十七年に日本に帰属するまでに沖繩はさまざま政治的外圧によってめまぐるしく変動することとなつた。この変動は、当然、沖繩の人々のアイデンティティーをも喪失させる。大城が常に「異邦人との接触」の面から内なる沖繩を捉えんとするのも確かにかやうな歴史的背景があつてのことであつて大城ならずともおそらく大半の沖繩の知識人は氏と同様な思考を保持してゐるのであろう。大正末期に故郷沖繩を出身しその後の生活を東京に求めた山之口隼にもはつきりとかかる歴史変遷の内実とそれによるアイデンティティーの喪失感⁽⁵⁾は理解されていた。隼が何故かたくなにもある時期まで故郷沖繩のことを表出しなかつたのか、そのひとつの原因はたぶんかかる歴史的背景に巣くう被支配民族のみが唯一実感として感じ得る社会的な圧力であつた。

現在、差別発言や差別待遇に対して世間は極めて敏感に批判的な

反応を示す。が、獺の生きた時代は決して今のようではなかった。特に朝鮮と沖縄の人々に対してはその差別意識はかなり露骨なものであってたとえばこれはひとつの極端な例なのだが下宿に（朝鮮人・琉球人お断わり）の札が下がっていたこともあったという。「会話」はまさにかように虐げられた人々の、つまりは差別されたことのある人々の「したくない会話」「逃れたい会話」の世界を鮮やかにわたしたちに提示してくれている。「天国ビルの斎藤さん」「穴木先生と詩人」「親日家」など日朝鮮人に取材した一連の小説群も世間の目をどうにか逃れながら社会の底辺で生活している朝鮮人の実態を巧妙に書いているのだが実際にはかような状況は今もって好転していないのであってむしろその実情はかなり歪なものとなってわたしたちの眼の前に突きつけられている。

しかし、かかる視点でこの一篇を読むのはむしろ容易なことである。たとえばここに岡本恵徳氏の次のような評がある。⁷⁾（「会話」では、主人公は「お国は？」と問われて「おきなわ」と答えることができず、「ずっとむこう」「南方」「亜熱帯」などと答える。それをそのまま主人公の劣等感のように読み取ることは可能である。多くの本で紹介されるように、事実沖縄出身者で、戸籍を東京に移して出身地をかくした人たちが多いというのだから、作者についての理解をぬきにして考えれば、そういう判断が出てくるのはやむをえないといえよう。（略）「会話」の中で、作者は「既成概念」の「寄留する」ところ、「偏見」の「眺める」ところの郷里をたずねられて、語りつくせないものを感じとったにちがいない。「僕」自身のとらえる「僕」と、他者のとらえる「僕」との間に、越えがたい溝をみいだして、それを越えるのにまどろっこしさを意識していた山之口獺氏にとって、「お国は？」と問いかけられて「おきなわ」とすうりと答えてすますることができるとすれば、それはむしろ容易な

ことであつたらう。しかし彼はそれをしない。というより彼にはそれができないのである。（略）「会話」というこの詩の「女」との会話はひとつのきっかけにすぎないのであって、そういう一種の自問自答がこの詩の中心となる。「風俗」「習慣」のどれをとりあげてみても、それは「おきなわ」であるのだが、しかしそれだけでは「おきなわ」ではない。それらのすべてをとりあげ、ことごとく言いつくすことができるのであれば、「おきなわ」をしめすことができるいはできるかもしれないが、ことごとく言いつくしてしまふことは絶望的に不可能なのである。そういうものとして山之口獺氏にとって「おきなわ」はあるのだ。そしてその「おきなわ」は「僕」の外にあるのではなくて「僕」のうちにある。だから「僕」は「僕」の女よ 眼の前に見える亜熱帯が見えないのか！と自分自身をつきだす以外にないのだ）

従来、この作品は、歴史的に差別されてきた沖縄の民衆の社会的差別感や自虐的劣等感から発せられたものとして了解されてきた。が、氏はかような視点をしりぞけ、むしろ、かかる社会的側面からこの一篇を読むのではなくてもっと獺内部の根本的な問題として、いいかえれば（他者）と（僕）との（越えがたい溝）の問題として、さらにいうなれば内省的な自問の問題として、または、自己規定できない内なる「おきなわ」の問題として、この作品の作品的意義を捉え直そうとする。そしてわたくしもまた氏のかような視点に大きな魅力を感じる。確かに獺には氏もいうように己が沖縄出身者であることの歪んだ劣等感はなかったと思えるからである。

しかしながら作品発表が昭和十年であるという動かし難い事実は、一方で当作品を社会的側面から読もうとする試論も補強する。三年前の昭和七年六月号「婦人公論」で久志富佐子という沖縄出身の女性がか書いた「滅びゆく琉球女の手記」には自分が琉球人であること

をひたかくしにかくして生きようとすする男のことが書かれてあつてそのタイトル自体が社会問題となつていたからである。とすれば、この作品はこれら両方の視点とその状況的背景とを今一度結合させて再考してみる必要に迫られているといえそうである。今後の研究を俟つてみたいと思う。

○

最後に一言だけ断わつておきたい。残念ながら今回の調査はいまだ十分であるとはいえない。その理由は全国の公私立図書館や主だった文学館を可能な限り調査してみたが雑誌「文藝」を全号揃えて見ることが困難だったためでそれゆえに未見の雑誌が少なからずあつたからである。かかる未見誌に獺の作品が掲載されている可能性は決して低いとはいえない。今後、個人所有の雑誌も含めた未見資料の収集につとめ、もし、新資料が発見された場合には改めて報告したいと思つている。大方の御教示をお願いしたい。なお、未見雑誌の予想発行年月は左記のとおりである（実際には刊行されていないことも考えられる）。ほとんどが終戦直後のものであつた。昭和二十年七月～十二月・二十一年三月～十二月・二十二年二月・二十二年八月・二十四年二月。

註

(1) 「文藝」は今まで三回発行所が移動している。昭和八年十一月創刊号～十九年七月終刊号（改造社）・昭和十九年十一月創刊号～三十二年三月休刊号（河出書房）・昭和三十七年三月復刊号～現在まで（河出書房新社）。

(2)

列記した各号の納品期日を示しておきたい。作品の創作期日を考へるうえでいちおうの目安にならう。昭和十年二月号（一月十三日印刷納本）・昭和十年十一月号（十月十一日印刷納本）・昭和十三年十二月号（十一月十一日印刷納本）・昭和十四年九月号（八月十日印刷納本）・昭和十五年五月号（四月十日印刷納本）・昭和十六年七月号（六月十日印刷納本）・昭和二十五年九月号（八月二十日印刷納本）・昭和二十六年二月号（一月二十日印刷納本）。

(3)

伊藤には他に①「解説」（『現代日本詩人全集 十四』・創元社・昭30・5）・②「山之口獺の詩―一枚の干物」（『現代詩手帖』・思潮社・昭38・9）・③「山之口獺」（『現代詩鑑賞講座 八』・角川書店・昭44・7）などがあるが「低音部からの発声」は②の内容を要約し簡潔にしたものといつてよい。また、③は②と「低音部からの発声」を一緒にしたものであつてその作品鑑賞にもかなりの重複が見られるようである。以下、「低音部からの発声」の全文を掲げよう。

（去る七月十九日、山之口獺氏が病気で亡くなられた。大柄のからだでいつも笑つていふような感じの人であつたが、その話題の多い生涯は六十歳の短さだつた。その追悼のために七篇の詩集を編んだ。私は「山之口獺」という名前が、まるきしの筆名だとおもつたことがない。友人知人の誰もが「獺さん」と呼ぶので、この方を本名だとおもつていた。「明治三六年（一九〇三）、沖繩に生まる。本名山口重三郎」と年譜をたどつても、これが本名だという実感が無い。「獺さん」という愛称が作品にも生活にも密着して、何かの集りなどで酒が入と獺さん

は琉球の踊りをおどり、するどい指笛を鳴らした。“御機嫌”で人生をわたってゆくようなところがあつた。年末になると例年のように貧乏座談会に出席したり貧乏話を書いたりしたが、その貧乏と、人生の面積のうえで同席する—というようなところがあつた。お互いに雑誌『歷程』の同人だけれども、私はあまり近しい交遊がなかつた。その私が故人の紹介めた文章をかくのは当を得ないかもしれないが、私はこの詩人をかならずしも“諷刺詩人”というようにはおほはない。なるほど「会話」などには諷刺的要素が多分にあるが、しかしこれが諷刺的意図の作品だろうか。これは望郷の歌である。“内地”の人たちの沖繩についての理解が貧弱なこと。それはいまでもそうであるだろうが、その理解されない孤独感から望郷の思いを述べたのである。私も詩人にとって人生の場はさまざまだが、山之口貌の作品の多くは、低音部からの発声によつて特徴づけられている。「定本山之口貌詩集」（昭和三三年刊）はほぼその全作品をあつめたものだが、そのどの頁をひらいても“権力感情”といふべきものは見当らない。それとはまったく逆に、いつさいの人事——社会生活全般を平衡化してしまうか、いつさいの事柄を均質化してしまうような、そういう“平俗”“化”の気分がいつぱいである。だが平俗化と卑俗とはちがう。この詩人には独得の人生論があり、それは人生の斜面をことさらに迂り落ちるような、その落下感覚によつて自分の人生の場を定着させるような、一種の逃避的な姿勢によつて語られる斜視の人生論である。諷刺的にみえるのは、その斜視の人生論がなんらかの真实性を衝きあてた場合である。そのようなアウトサイダー風な身の運びが、一つの終点に到達したのが「ねずみ」である。ねずみの死骸が一枚の干物になり、死の影すら無い一個の物質

(4)

になつてしまふということ。そこにこの詩人における存在論的な生の意識があつた。〜

「創刊の辞」を全文掲載しよう。

〈我社は文学復興の声我全文壇に漲るが故に、一時の出来心から本誌を創刊したのではない。我社の文学に関心するは既に久しいものだ。殊に彼の「日本文学全集」を集大成して怒濤の如き我大衆の喝采、画期的事功を挙げたことは歴史的事実として昭明である。然るに我國の文学が最近萎微として振はず、文藝の貧困をかこつもの多きは何に起因する。我々は我文学の徒が社会の飛躍に心到達せず、依然狹隘の文壇意識、社会意識に支配せられて広く世界の新しき主潮を取入れるのを怠つてゐたのだと断ずるに躊躇しない。我「文藝」はかかる因循、退嬰の空気を打破して我民族飛躍時代にふさはしき新文藝の建設のために誕生したものである。我民族は現在画期的の飛躍途上にある。我文学またその帰趨に低迷して居るとは云ふものの、現下は実に偉大なる文学の出現する胎生期であり、黎明期であるのである。此秋、我「文藝」は新造戦闘艦の如き雄姿を以て生れ出でた。その希求するところは我全大衆へ偉大なる文学を贈るにある。民族飛躍期の偉大なる芸術を生産せんためである。我々は一路勇敢に与へられたる役割に進発せんとするものである。我大衆の熱烈なる、そして親愛なる支持を期待してやまざるものである。〉

(5)

「世紀」が掲載された同月号には中村地平「離れ島にて」も掲載されている。この作品には沖繩にふれた部分もある。

(6) 「私の作品」(『新沖繩文学』第八号)

「水平軸の発想」(『叢書 わが沖繩』第六卷「沖繩の思想」
木耳社・昭和四十五年十一月)、「現代沖繩の文学と思想」・沖
縄タイムス社・昭和五十六年七月参照)

(一九九〇・三月稿)

九州大学文学部助手

相 子 (初出本文)

どさくさまぎれの汽車にのつてゐて
ぼくは金入を掏られたのだ
掏られてふんがいしてゐると
ふんがいしてゐるじぶんのことか
をかしくなつてふき出したくなつて来た
まあさうふんがいしなさんなど
とんなな自分に云つてやりたくなつたのだ
もつとも金入にいられておくほどの
お金なんぞはなかつたが
みんなの名刺ではち切れさうにはなつてゐた
いまごろは奴も
とんなな顔つきをして
ふんがいしてゐることなかも知れないのだ
奴はあるひは
鉄橋のうへあたりに来て
そつとあけて見てそのまゝそれを
窓外に投げ棄てたのかも知れないのだ。

相 子 (既刊詩集収録本文)

どさくさまぎれの汽車にのつていて
ぼくは金入を掏られたのだ
掏られてふんがいしている
ふんがいしているじぶんのことか
をかしくなつてふき出したくなつて来た
まあさうふんがいしなさんなど
とんなな自分に言つてやりたくなつたのだ
もつとも金入にいられておくほどの
お金なんぞはなかつたが
金入のなかはみんなの名刺ばかりで
はちきれそうにふくらんでいたのだ
いまごろは掏った奴もまた
とんなな顔つきをして
名刺ばかりのつまった金入に
ふんがいしているのかも知れないのだ
奴はきつと
鉄橋のうへあたりに来て
そつとその金入を
窓外に投げ棄てたのかも知れないのだ

勲奴 尚子 (初出本文)

安いめし屋であるとおもひながら腰を下ろしてゐると、側にゐた青年がこちらを振り向いたのである。青年は僕に、酒をすすめながら言ふのである

アナキストですか

さあ！と言ふと

コムミュニストですか

さあ！と言ふと

ナンですか

なんですか！と言ふと

あつちへ向き直る

この青年もまた人間なのか！まるで僕までが、なにかでなくてはならないものであるかのやうに、なんですかと僕に言つたつて、既に生れてしまふた僕なんだから

僕なんです

うそだとおもつたら

みるがよい

僕なんだからめしをくれ

僕なんだからいのちをくれ

僕なんだからくれくれいふやうにうごいてゐるんだが見えないのか！

うごいてゐるんだから

めしを食ふそのときだけのことなんだといふやうに生きてゐる

んだが見えないのか！

生きてゐるんだから

反省するがめしが咽喉につかへるんだといふやうに地球にゐる

僕なんが見えないのか！

それでもうそだとおもつたら

かんがへてもみるがよい

僕なんだからと言つたつて、僕をみせるそのために死んでみせる暇などないんだから

僕だと言つてもうそだとおもつたら

青年よ

かんべんするがよい

僕が人類を食ふ間

ほんの地球のあるその一寸の間。

僕が人類を食ふ間

勲奴 尚子 (既刊詩集収録本文)

安いめし屋であるとおもひながら腰を下ろしてゐると、側にゐた青年がこちらを振り向いたのである。青年は僕に、酒をすすめながら言ふのである

アナキストですか

さあ！と言ふと

コムミュニストですか

さあ！と言ふと

ナンですか

なんですか！と言ふと

あつちへ向き直る

この青年もまた人間なのか！ まるで僕までが、なにかでなくてはならないものであるかのやうに、なんですかと僕に言つたつて、既に生れてしまふた僕なんだから
僕なんです

うそだとおもつたら

みるがよい

僕なんだからめしをくれ

僕なんだからいのちをくれ

僕なんだからくれくれいふやうにうごいてゐるんだが見えないのか！

うごいてゐるんだから

めしを食ふそのときだけのことなんだといふやうに生きてゐるんだが見えないのか！

生きてゐるんだから

反省するとめしが咽喉につかへるんだといふやうに地球を前にしてゐるこの僕なんだが見えないのか！

それでもうそだと言ふのが人間なら

青年よ

かんがへてもみるがよい

僕なんだからと言つたつて、僕をみせるそのために死んでみせる暇などないんだから

僕だと言つても

うそだと言ふなら

神だとおもつて

かんべんするがよい

僕が人類を食ふ間

ほんの地球のあるその一寸の間。

附記

本稿の作品引用は思潮社版「山之口鏡全集」に拠っている。